6-7　実践協力校における授業実践
事例⑦　小田原市立千代中学校
2年生　社会科〔地理的分野〕

ポイントになる主な学びのプロセス

- **自分の身の周りのできごとに関心をもつ**
- **他者の考えを聞き、自分の考えを再構築する**

Ⅰ　単元計画

1．単元名　中学校第２学年　社会科〔地理的分野〕「日本の資源・エネルギー問題」

2．単元の目標

①世界の資源・エネルギーの生産量や消費の現状や課題を理解させるとともに再生可能エネルギーの活用について考える。

②日本における資源の有効活用や持続可能な社会の実現に向けてのエネルギー活用について考える。

3．単元の指導計画（４時間扱い）

	ねらい（◇）・学習内容（◆）
1	◇世界において鉱産資源の生産のさかんな地域と消費量の多い地域の特色を理解する。 ◇鉱産資源の生産の分布を理解させるとともに世界各地で進む資源の開発と変化を考える。 ◆世界の資源・エネルギーの生産や消費の現状や課題を理解させるとともに再生可能エネルギーの活用について考える。
2	◇日本は資源を輸入に頼っており、限りある資源を有効に活用する取組が行われていることを理解する。 ◆日本における資源の有効活用や持続可能な社会の実現に向けてのエネルギー活用について考える。
3	◇毎日使っている電力について関心を持ち、日本のエネルギー政策の現状を理解し、利点と課題について整理することで、自分の考えを構築する。 ◆エネルギー政策について、３つの案を提示し、個人、グループで利点と課題を考える。
4 本 時	◇日本のエネルギー政策が持続可能な社会の実現に向けての取組でもあることをふまえ、他者の考えを聞くことで、自分の考えを再構築する。 ◆前時で学習した日本のエネルギー政策について、周囲との意見交換を行い、比較・検討をする。 ◆日本のエネルギー政策について、現状を踏まえた上で、未来はどうあるべきかを、個人で考える。

Ⅱ　本時の様子

１．本時の目標　○日本のエネルギー政策が持続可能な社会の実現に向けての取組でもあることを理解する。

「政治的教養を育む教育」で身に付けさせたい力の視点

２．本時の展開

過程	学習活動（活動の流れ）	ポイントになる学びのプロセス
導入	**○前時の振り返りを行う。** ＊A～Cの日本のエネルギー政策の３つについての利点と課題を振り返る。 **○今後の日本のエネルギー政策は、A～Cのどの案が現実的か？** A 日本のエネルギー政策は、経済的・確保できる資源の視点から考え、火力を中心として発電すべき。 B 日本のエネルギー政策は、確保できる資源、環境面の視点から考え、原子力の再稼働を推進して、発電すべき。 C 日本のエネルギー政策は、安全面、環境面の視点から考え、再生可能エネルギーを中心にすべき。	毎日使っている電力エネルギーについて、関心を持つ。（関心・意欲・態度） 自分の身の周りのできごとに関心をもつ。
展開	○前時の授業を受けて、『今後の日本のエネルギー政策はA・B・Cのうち、どの案が現実的か？』の問いに対し、個人でどれを選んだか、選択の理由も含めて意思表示する。 ○隣同士、前後など、自由に意見交換を行い、感じたことを全体で表明する。 ○ワークシートに「今後の日本のエネルギー政策はどうあるべきか」を個人で考え、記入する。	未来の日本のエネルギー政策について、現状を踏まえ、自分の考えをまとめている。(思考・判断・表現) 他者の考えを聞き、自分の考えを再構築する。
まとめ	**○ワークシートの内容について、発言する。** ＊どれがよいかということではなく、自分の意見を持つことが大切であることを伝える。	**目指す子どもの姿** 日本のエネルギー政策について、自分のこととしてとらえようとする姿。様々な視点を他者との話し合いから、より自分の考えを深めようとする姿。

Ⅲ　研究協議



１．自評

○当初は「再生可能エネルギー」が優勢と予想していたが、他クラス実施のプレ授業や本時でも「火力」や「原子力」が優勢で、「現状の安定」を優先する生徒の実態が見えた。ある生徒が、本時の終末に「電力の安定供給を守っていくには（何かを）犠牲にしなければならない」という発言をしていることが印象的だった。生徒たちも、集団における活動において、何かしらの「制約」があり、折り合いをつけて生きていくことを学んでいる。どの政策が最も「現実的」なのかという視点は、政治的教養を育む教育の一つのきっかけになると感じた。

２．研究協議のテーマ

○他者の考えを受け止め、自分の考えを深める手立てとは

３．研究協議の成果と課題

成果・「政治的教養を育む教育」として、日本の政策に関わる重要なテーマを議論すること自体には、大きな意味がある。「自分のこと」としてとらえにくい課題を設定する場合には、生徒の関心を引き出す工夫が求められる。

課題・自分の意見を構築するための根拠や基盤となる知識の整理が必要である。例えば、発電のコスト面や安全面などの視点を示して表にするなど、のちの議論がかみ合うためのツールを作る作業を行うことが求められる。また、資料の提示についても、視聴覚資料等、生徒の想像力を引き立てることも効果的である。

Ⅳ　実践協力校での授業実践を基にした指導事例

H30-３　中学校２年生　社会科[地理的分野]　指導事例
「日本の資源・エネルギー問題」

【単元目標】

・世界の資源・エネルギーの生産量や消費の現状や課題を理解させるとともに再生可能エネルギーの活用について理解するとともに、様々な資料や他者の意見を参考に、自分の意見を再構築して日本における資源の有効活用や持続可能な社会の実現に向けてのエネルギー活用について多面的・多角的に考える。

【目指す子どもの姿】

・日本のエネルギー政策について、自分の現在や将来の生活に引き寄せてとらえようとし、様々な資料や他者の意見を参考に、自分の考えをより深めようとする姿。

１　本単元の流れと「政治的教養を育む学びのプロセス」との関係

学　習　活　動（全４時間）	ポイントになる学びのプロセス
世界の資源・エネルギーの生産や消費の現状・課題の理解① ○世界の資源・エネルギーの生産や消費の現状や課題を理解する。 **持続可能な社会の実現に向けてのエネルギー活用について①** Ｔ：日本では、豊富な水資源を活かした水力発電を行っていたが、石炭・天然ガス等の輸入資源を使う火力発電や、原子力発電を中心としているね。 Ｓ：日本に乏しい資源を使った発電が多いのはなぜだろう？ ……中略…… Ｔ：再生可能エネルギーによる発電がすすんでいるということだけど、身近に実際に活用している事例を見たことがあるかな？ Ｓ：家の近くに、ソーラーパネルがついた家を見たよ。 Ｓ：祖母の家に遊びに行ったとき、地熱発電を利用した温水プールに遊びにいったことがある。……後略…… **日本のエネルギー政策の現状①** ○今後の日本のエネルギー政策について、火力・原子力・再生可能エネルギーの３つの案を提示し、個人、グループで利点と課題を考える。 **日本のエネルギー政策の未来はどうあるべきか①** Ｔ：今日は、理由を含めて、自分の立場を表明してもらうよ。**クラス全体で発表する前に、近くの人と自由に意見を交換してみよう。**～中略～ Ｔ：では、席に戻って、前を向いてください。意見を言ってくれる人は？ Ｓ：原子力発電は、万一の事故が心配だから、火力発電が現実的だと思う。 Ｓ：火力発電は温室効果ガスが出るから地球温暖化に影響するし、石炭や原油の輸入費用がもったいない。 Ｓ：再生可能エネルギーだって、発電費用がかかるから、広がらないのでは？ Ｓ：一番大切なのは安定した電力の確保だと思うから、再生可能エネルギーは難しいと思う。安定した電力の確保のためには、環境問題だったり、放射能漏れの危険性だったり、何かを犠牲にしなければならないのかな…。 Ｔ：**「持続可能」という言葉を学んだよね。皆が大人になった頃、日本は何を優先して電力を作っているかな？授業をふまえて、自分の考えをワークシートにまとめよう。**	**ポイント２** **○他者の考えを聞き、自分の考えを再構築する** **ポイント１** **○自分の身の周りのできごとに関心をもつ**

2　政治的教養を育むためのポイント

ポイント1

生徒が「自分のこと」としてとらえられるように、学習課題の設定を工夫しましょう。

中学校社会（地理的分野）では、自分の生活圏から離れた地域や、国や地球的規模の課題を扱う学習が多くなります。しかし、それらの課題が、実は自分の生活と密接に関連していることに気付かせたいものです。

本事例では、「日本の資源・エネルギー問題」を「自分のこと」としてとらえられるように、単元の終末を、「（よりよい未来としての）今後の日本のエネルギー政策について記述する」と設定されていました。このように、学習課題の設定に様々な工夫をすることで、生徒の関心を引き出すことが重要です。

ポイント2

政策の利点や課題点を整理することで、論点の焦点化を図りましょう。

現実の政策と関連性が高い課題における学習をすすめる場合、利点や課題点を理解し、整理することが重要です。複数の資料から政策の利点や課題点を読み取り、ノートに書き出して整理する等、のちの議論がかみ合うためのツールを作る作業が有効です。

本事例では、火力発電・原子力発電・再生可能エネルギーによる発電の３つの利点や課題点を個人で読み取ったのち、話し合いの前時において、グループ別に共有化し、ホワイトボードにまとめました。共有化することで、生徒たちは、それぞれの発電の利点と課題点を吟味した上で、自分の意見を決めていました。



このように、利点や課題点を事前に共有することにより、話し合いの論点が焦点化され、かみ合った議論が展開される効果が期待できます。

同じ意見を持つメンバーで話すことで主張が深まる利点もありますし、一方で、意見の違う他者の視点を得ることで、自らの主張を変える生徒も出てくるかもしれません。話し合いの手法については、生徒の実態や学習課題によって、工夫することが望ましいでしょう。

なお、本事例のような学習課題では、必ずしも合意形成にこだわる必要はありません。まずは、様々な立場や主張を聞き合うことで、自らの思考の幅を広げ、自分の考えを再構築することに重点を置くことも考えられます。学習課題や生徒の実態に応じた単元構想を行っていきましょう。